荒木光太郎文書 728

8

(5)

第四章 緒戰

第一節 攻略作戰の構想

一九四一年夏秋に於ける日本の兵力中、南方作戰に使用し得る兵力は海軍は聯合艦隊（海軍航空兵力の主力を含む）の殆ど全力であつたが陸軍は其の主力を支那作戰に充當し、又有力なる一部を以て對蘇防衛兵力として滿洲に配置するを要したので、僅かに師團十一箇、航空兵力約七百機程度以上に出づることは不可能であり又陸海軍の作戰に充當し得る船舶の限度は合計約三百九十噸であつた。

以上の兵力を以て南方攻略範域（第一部第一章第二節第二項基本戰略の項參照）即ち東西南北各約二千哩に亘る地域の攻略作戰を終始する爲に日本大本營は如何なる點に成算を求めたのであらうか。

當時此の豫想作戰地に在つた英米蘭の兵力は總計陸軍約三十七万、飛行機約七百機、海軍は布哇、印度洋方面を合し戰艦、航空母艦各七隻内外を基幹とするものであり、同年九月頃迄に得た軍事情報に依り各

地區毎に仔細に研究の結果陸上兵力の質概ね劣弱であつて我にして重點的に兵力を集中使用するに於ては攻略作戰間各地區共に常に約二倍乃至三倍の優勢を以て攻略作戰を終始し得るの見透を得た。海上作戰や上陸作戰に幾多困難なる問題はあつたとはいへ大体に於て十分なる自信を以て成功に導き得るものと信ぜられ一應比島は五十日、馬來は百日、蘭印は百五十日即ち約五箇月を以て大部の攻略作戰を終了し得るものと想定して居たのである。

此の際最も懸念せられた問題は太平洋方面からする米國艦隊の出撃であり、之に對しては眞珠灣の奇襲作戰を決行することに依り南方に於て海上權の優位を保持し得るものと考へたのである。實に此の奇襲作戰自体は大なる冒險であるが之が南方攻略作戰を成功せしむる鍵となるべき重要なる價値を有したのである。

必ずしも十分とは云へぬ海軍の兵力を以て常に局地的優勢を保持しつゝ、南方の諸地域を攻撃するが爲には如何なる順序と如何なる兵力

配分を以て作戦を遂行するが可なりやと云ふ問題は斯如き大海洋作戦は戦史上にも殆ど前例を見ぬので、異常なる努力を以て研究を重ねられたのであるが比島、蘭印、「マレー」の順序に攻略すべきや或は其の反対に「マレー」蘭印、比島の順序に攻撃を進捗せしむるを有利とするやが研究の一課題であつた。而して、種々検討の結果、最大限に奇襲の效果を獲得し敵をして對應準備の遑なからしむるを要すとの結論から、比島、馬來及眞珠灣の同時攻撃をなすことに決定して之に應ずる兵力の配分を行つたのである。

各地區に對する攻撃作戦に於ても困難なる問題は、

(一)「マレー」上陸作戦が同方面の英軍航空兵力が比較的優勢なる狀況下に於て、戦闘機の活動限度たる約三百哩を隔つる南部佛印の我が航空基地の援護のみに依り成功を期待し得るやといふ問題と、

(二)「ジャワ」「スマトラ」に對する攻撃が「ボルネオ」「マレー」等の占領直後の我が基地に依る航空活動に依り十分なる成果を收め得るや、否や、特に油田地帯を大なる損害を與ふることなく攻略し得るやと云ふ問題とであつた。

93

此の二つは開戦直前まで解決し得ない困難なる問題であつたが、前者は馬來作戦に任じた南遣艦隊司令長官の艦隊の損害を意とすることなく蔦難を排して陸軍作戦に協力すると云ふ確固たる決意と南部佛印の基地航空部隊の全滅をも辞せざる戦意とに依り解決を見ることが出來、後者は「パレンバン」に對する航空挺進作戦の採用と「ボルネオ」「マレー」に對する適切なる航空基地の推進計畫の策定に依り解決したのである。

右の問題は共に航空兵力の運用に關する事項であり之は我が航空母艦の全力を眞珠灣方面に使用しなければならなかつたことから起つた當然の結果である。

此の如く攻略作戦に於ては「マレー」作戦の成否が綜合作戦の成功を左右することゝなつたので此の作戦に充當する陸海空の兵力は量に於ても質に於ても最も慎重なる配慮に依り選定せられ、比島作戦の如きは兵力上若干の犠牲を忍ばねばならなかつた。又陸軍兵力の充分ならざる點を補ふと共に船舶の經濟的使用をなす爲に此等の二重使用に著意し比島、香港、瓦無、馬來等の作戦に任じた陸軍兵力の一部又は大部、及船舶は爾後更に他方面の作戦に充當し、又緬甸作戦は他方面の作戦進捗後轉用兵力を以て遂行することに決定を見たのである。

94